

1991年を迎えて

日本オペレーションズ・リサーチ学会会長
三菱電機㈱

岡 久 雄



OR学会の皆様、あけましておめでとうございます。新しい1991年を迎えるにあたり、一言ご挨拶申し上げます。

1. 最近の国際情勢

昨年は歴史的に見ても画期的な国際情勢の変化がございました。まず第一に東西の融和が進行し、東欧諸国の自由化、ベルリンの壁の崩壊などはすでに歴史の1ページとなっています。

東欧諸国の自由化は情報化社会の進展にあずかるところが大きかったことは明らかですが、戦後二極に分断されていた地球上の人類社会が情報化の波により再統合の道を進み始めたことは誠に好ましいことであると思います。

今後のソ連におけるペレストロイカの進展や中国の民主化あるいは朝鮮半島の南北対話の進展などを見守りながら、ますますグローバル化する国際情勢を的確にとらえることが一層重要になってまいります。

ただ今は、湾岸紛争やイスラエルとアラブの問題など各地に予断を許さない状況もありますが、国際社会の潮流は東西の融和、南北の経済協力を軸として21世紀の新しい時代を創り上げていく方向に向かっており、その期待と不安の中で、わが国の果たすべき役割もますます増大してまいります。

2. 国内の動き

近年の日本経済は内需主導の拡大をつづけ、貿

易不均衡も漸次改善されていますし、多くの企業が国際化の努力を重ね、現地社会との調和ある共存を図っていることも心強い動きであります。

しかし今後のわが国の政治、経済、社会情勢は必ずしも楽観を許さない状況にあります。その第1の傾向として、製造業の技術者不足や若年労働者の減少、さらには高齢化や外国人労働者の処遇などの問題があります。

第2には、資産価値の増大に伴った経済のバブル化現象に注目する必要があります。申すまでもなく経済の基盤は生産すなわち「モノ作り」にあります。

このような国内外の急激な環境変化に対し、今やまさに政治も経済も、その制度や体制の根本的な見直しや再構築が迫られていると申せましょう。

1990年代は来るべき21世紀の入口として史上未だかつてないほどの重要な時期であります。

3. 技術の進歩と新しいORの期待

科学技術の分野では、まず第1に技術革新が大きなコストを必要とするに至ったという点に注目したいと思います。

たとえば、エレクトロニクスの分野では、研究開発に要する費用は大変膨大なものになっており、企業レベルあるいは国家レベルを問わず、独力ですべてを賄うということは不可能となっています。

日米の半導体業界首脳は、以上の状況認識を共

有し、競争と協調の哲学を次の3つのCで表現しています。

第1は、進歩のために競争(competition)を行なうこと。

第2は、共存のために協調(cooperation)を進めること。

第3は、人類社会の繁栄に貢献(contribution)することです。

科学技術の分野で第2に顕著なことは、コンピュータのハードウェア、ソフトウェア両面での進歩があります。コンピュータは、まさに複雑な現象を解析するツールとしての利便性を発揮するに至りました。

またファジィ制御などの概念も日常語化しており、近い将来にはニューロチップの開発なども予想されます。

このようなツールの発展に対応する新しいORの出現が期待されます。すなわち、一筋縄で解決できなかった予測やシミュレーション、最適化問題に対する新しいアプローチが今後数年の間で活発化するものと思われます。

このような試みが個人や単独のグループを越えた国際的な研究ネットワークで展開されるであろうことも大変に心躍る期待であります。

4. OR学会の活動

昨年のOR学会の活動をふり返ってみますと、産・官・学各界にわたっての研究発表会、研究部会、講演会、OR企業サロン、セミナーの開催等

学会活動は従来にひきつづ活発に実施され、しかも企業戦略、地域戦略、政策立案への総合的なOR適用という新しいOR確立の努力が試みられていることを大変心強く感じます。

また、IFORS視察団派遣を通じての海外との交流やAPORS(アジア太平洋地域OR学会連合)活動への支援、国際数学会議の日本における共催等が積極的に展開され、国際社会への貢献も地道に進められました。

日本学術会議および他学会との交流も非常に活発で、また、各支部の活動も積極的に展開されました。

5. 今後の課題

昨年森村英典先生の後をついでOR学会の会長に選任されました折から、ORの新しい役割を前述の3つのCに結びつけて理解してきました。

社会が高度化し複雑化してきますと、あらゆる活動や組織が単独では存在できなくなってきました。価値観も多様化し、事象の予測も複雑化しています。

このような状況のなかで、人にやさしい技術、地球にやさしいシステムを構築し、環境変化への迅速かつ柔軟な対応を進めてゆくには、単に効率化の追求のみでは不十分になっています。

それぞれの多彩な活動の中で、総合的なORの適用を志向いただき、学会の発展・成長と会員各位のご活躍を心より期待する次第です。